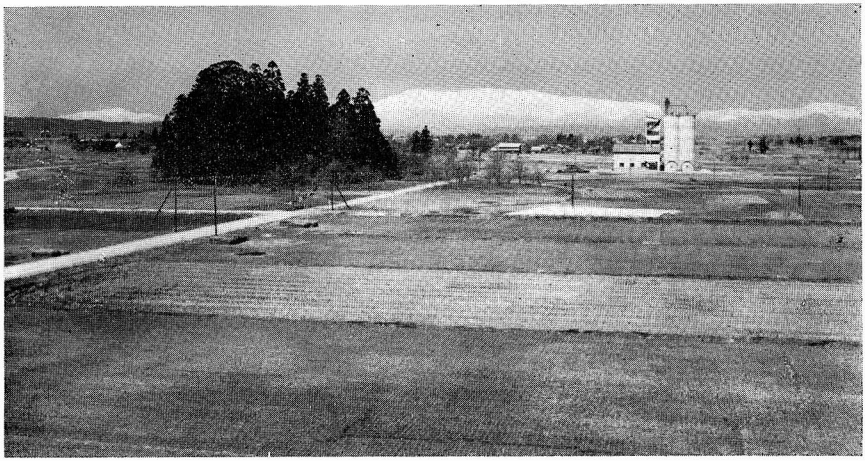

農業改善事業の中に立つ、そのシンボルのような、米麦流通合理化モデルプラント

てある。館の内村、川南村でもその頃、同様のものが発足していると思うが、今ここに資料がないので、主に荒井村のものについて述べておこうと思う。

その初代組合長は、当時村長であった鈴木清作である。その順調の発達をみせたかにみえたのが、昭和九年の東北地方の冷害で組合も自由経済の嵐には勝てなくなり、そのあおりを食い、倒産寸前に追いこまれ、解散か再建かで一週間も会議の連続があったこともあるという。まがりなりに再建に踏み切ったが、それに努力した人として越智寅一の名などが語られている。この時代には金庫には二十五銭しかない日があったとか、資金繰りが如何に難渋であったかを物語っている。

昭和十九年三月二十六日、戦争がたけなわになって、主食の米の供出割当制などが強化されるにつれ、政府への協力というよりむしろ末端の御用立て的な立場におかれて、これが「農業会」という名で改組された。昭和二十年八月十五日終戦となり、GHQは、農業会が戦争に協力したということで解散を命じられ、昭和二十三年五月で農業会は終った。

しかしこれは一応の発展的解散であって、ただちに同年同月の